

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	《アンドロマク》の結末をめぐって
Author(s)	松田, 照彦
Citation	フランス文学, 13 : 1 - 8
Issue Date	1980-05-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040919
Right	
Relation	



《アンドロマク》の結末をめぐる

松田照彦

I

ラシーヌ作《アンドロマク》は、一般にラシーヌ悲劇が確立された最初の作品と認められている。ラシーヌは、シュブリニーの《アンドロマク、あるいは愚かな論争》と題された諷刺劇にて、《アンドロマク》の詩句の未熟さを指摘されながらも、作劇術については、作を重ねる毎に熟達していった。この点に関しては、ここで問題の対象から除外し、悲劇におけるもう一つの重大な要素、即ちラシーヌ悲劇のテーマについて考えてみたい。

ラシーヌは、《アンドロマク》に先立つ、《アレクサンドル》によって、当時既に、主要な劇作家の一人に列せられたが、《アンドロマク》では、同時代の悲劇、そして自己自身の悲劇を革新したとみなされている。

ラシーヌが《アンドロマク》をもって、他の同時代の悲劇を革新したことについては、問題を文学史、悲劇史のさまざまな観点から考察することが必要である。ここではまず、彼が自己の悲劇を革新した点について、その立証の一助としたい。

ところで、悲劇において結末の相が示すものは、とりわけ大きな比重をもっている。ここに全悲劇のペルスペクティヴの視点が与えられるからである。言いかえれば、ここに悲劇の全体的な意味が明らかになるのである。

然るに、《アンドロマク》の結末には、オレスト、エルミオヌ、ピリュスの三人が破滅し、アンドロマク母子が捕われの身から王位について、二つに分裂した運命展開の帰結がみられる。

ラシーヌ自身が、その豊かな古典の素養をもって常に劇作の指針を求めたアリストテレスは、《詩学》の中で、悲劇の結末は単一の結末を持ったものでなくてはならぬこと、そしてそれは、幸福から不幸へ移る変化でなければならぬことを述べている。⁽¹⁾ 《アンドロマク》の結末は、明らかにこの教訓に反している。しかしながら、この作品をなおラシーヌの傑作としているのは一体何であろうか。

II

上に提起された問題を解くにあたって、まず、結末に至る過程、劇展開を導く仕組について考察する。この観点を省いては、この悲劇の結末の意味するもの、ひいては、この悲劇全体の意味するものも漠然としたものになるからである。この考察を進めるにあたって

は、主としてch. モロンの論考を手がかりにした。

劇の冒頭には、四人の主要人物がいて、オレスト→エルミオヌ⁽³⁾→ピリュス→アンドロマク→エクトル（死者）という恋愛（アンドロマクの場合、夫婦愛）の方向をもった人間関係がある。事実関係のみに着目すれば、劇のペリペシーは、アンドロマクの、ピリュスとの結婚承諾と自殺の決心によって始動し、ピリュスはエルミオヌを完全に退け、怒りに駆られたエルミオヌがオレストにピリュス殺害を強要し、これが果されると、エルミオヌは後追い自殺をする、という推移をとる。ここに生じた殺人の機構は、「攻撃性の円環」⁽⁴⁾である。それは愛されない女性が、欲求不満によって憎しみを生じ、父あるいはダブルに⁽⁵⁾あたる人物を用いて、その対象を攻撃するが、その結果は自己の不満を決定的にするという、自己懲罰に帰着する。文字通りエルミオヌは、自己懲罰の結果としての自殺に終る。悲劇の破壊的なエネルギーは、エルミオヌにおける欲求不満の爆発にある。

一方オレストについて見れば、彼は全く利用されたに過ぎず、第一幕第1場での表白通りの悲観的世界観を現実を確認する。更にアンドロマク母子は、執拗なピリュスの強請から逃れることができ、それに加えて、母は女王に、子は次の王位を担う王子となり、かつての敵国、ギリシャ方の一つエーペイロスに君臨するのである。したがって、この悲劇の中に三つの核が結晶していく。そして、これはとりも直さず悲劇の推移の三拠点とみなすことができる。先に示した恋愛の連鎖は、次のように書き換えられる。オレスト→エルミオヌ=ピリュス→アンドロマク母子。

この三つの要素について、それぞれ考察してみよう。まず第一要素のオレストについて、彼の願いは、ギリシャ代表としてアスチャナクス引渡しをピリュスに要求することが表向きの役柄にもかかわらず、エルミオヌを得ることである。それはオレスト的表現を用いるなら、追跡し仮借ない神々からの救済でもある。悲観的運命観を我身に対して抱くオレストは、そのエーペイロス到来と共に、この地に現実の不幸をもたらす働きをなす。オレストは、フロイトが『精神分析的研究からみた性格類型』⁽⁶⁾について述べた中の、罪の意識から罪を行なう者に該当する。それは、罪を犯すことによって罪責感を軽減、あるいは解消しようとする人物である。しかしながら、優柔不断で誇大妄想の傾向の強いオレストが自ら現実に企てる罪は、エルミオヌ強奪に過ぎない。

第二要素のエルミオヌ=ピリュスについて、これは自己懲罰の「攻撃性の円環」を含む一セットと考えることができる。最もダイナミックな要素を成している。二人共、心からの残虐さはないが、サディスト的傾向が認められる。オレスト同様、どちらも、その不幸は受け入れられない恋からもたらされ、不幸の脱出を恋愛の成就、そして結婚の中に求めて止まない。

オレストの性格が宿す潜在的罪は、実行の段階でためられながら、エルミオヌの強要

によって機会を得て、ピリュス殺しという現実の罪に至る。エミリオヌはピリュスへの恋の悩みにおいて、人間的な処女の情感を示しながらも、悲劇の筋展開に果す役割としては、1676年以後の版では一貫して「太母」である⁽⁷⁾。しかし、1668年、1673年の版では、第五幕第3場において、ピリュス殺害直後の、アンドロマクの二度目の捕囚から解放する役割を果し、エウリピデスの劇における、非人間的な「石女」^{うますめ}即ち、太母の役割に徹しているのではない。ピリュスは、アンドロマク母子がギリシャの脅威から逃れることを望むが、エルミオヌは更に、アンドロマク母子を、結果的にピリュスからも解放し、安全な王位につけて、ピリュスが始めた、アンドロマク母子救済の事業を引き継いで完成したことになる。その役割を果すと、彼女は自殺する。1676年版以後は、エルミオヌが直接自らの手で行なうアンドロマク解放は削除されるが、結果的にエルミオヌが、ピリュスのアンドロマク母子救済の事業を完成させたことに変わりはない。

第三要素のアンドロマク母子について。子アスチャナクスは、トロイアの純粋な王子である。母アンドロマクは、ピリュスの恋愛そして結婚の要求に同意せず、頑なに亡き夫エクトルとトロイアに忠誠を尽そうとする。この点でエウリピデスの《アンドロマケ》とは全く趣きを異にする。エウリピデスにおいては、ピリュスとアンドロマケの子モロソスが、父の死後モロシアの地に運ばれて、その地の王位につく結末となる。それは、ピリュスの連なるアイアコスの血筋とトロイアの血筋のためであった。ここには、二勢力の融和による新たな秩序が成立する理念がみられる。

ラシーヌの劇においては、いわば純血主義が堅持される。ラシーヌは序文で、彼が依拠しているのはホメロスであると暗示しているが、アスチャナクスの物語において、ホメロスの取扱いとも相違している。ホメロスにおいて、アスチャナクスは、ユリスによってトロイアの城壁から投げ殺されることになる。アスチャナクスを通じてのトロイア再建は不可能である。ラシーヌは、アスチャナクス取扱いに関して、ウェルギリウスの精神に立ったのである。即ち、純粋なトロイアの血が復権する形である。ラシーヌは、《アエネーイス》の叙事史の経過をまたずして、トロイア復興をこのような形で実現させた。

アンドロマク母子は結末において、その捕われの身から、悲願である解放を得、更に王位に達する。二人は捕われの境遇にある以上、自ら積極的な振舞いによって解放を達成することはできない。しかしアンドロマクは消極的な形ではあるが、解放そして王位に達する筋展開に深く関与している。それは、彼女がピリュスとの結婚承諾と自殺の決心をしたことにある。これがピリュス殺害を呼んだからである。

ところが、このアンドロマクの決心は、次の二詩句から生じた。

夫の墓に、どうすればよいか伺いに参るのです。 (第三幕第8場)⁽⁸⁾

これが夫、その人の命じたことです。 (第四幕第1場)⁽⁹⁾

ここにはアンドロマクと死者エクトルの間に、問と答という形式がみられる。あたかもアンドロマクには死者との間に、超自然的交流が存在するかのようである。しかしながら、《アンドロマク》に、神なり死者なりによる超自然的介入を確証するものは何もない。M. デルクロワも、この悲劇は超自然的な世界は関与せず、人間的平面に止まっていることを認めている。アンドロマクのこの決心は、多くの論者の論議の対象となっていて、作品の内的論理からみて問題がある。アンドロマクは、彼女の死後のアスチャナクス安全の保証をピリュスの、結婚の祭壇での誓いとその人柄に置いている。然るに、彼女自身は祭壇の神聖さを免がれる心算である。彼女はピリュスを策略にかけようとした。しかしその策略は、最後まで実行されていたなら、ピリュスの憤激を買わずには済まない。このような策略をアンドロマクは敢えて実行し得るだろうか。

しかし計画は実行に移され、そこでアンドロマクの予測しない、ピリュス殺害という事件が生じて、母子は解放され、願うべくもなかった敵地における母子のみによる王位到達の結末に推移する。

III

上にみたように、《アンドロマク》は、三つの要素、即ち登場人物のすべてが、結末に向かって密接な関わりを持った劇である。決して別々の筋展開から二つの結末、アンドロマク母子の幸福に至る結末と、他の三人の破滅に至る結末が生じたのではない。

ところで、1676年に削除された第五幕第3場では、アンドロマクが再び捕われの身になって、殺害されたピリュスに同情し、我身の犠牲になったことで、そしてピリュスの寡婦になったことに対して悲嘆の台詞を口にする。劇の結末では奴隷の境涯から解放されて王位についても、この場面によって、アンドロマク母子も、ラシーヌが悲劇の要件とする「あの壮麗なる悲しみ」を伴うことになる。ラシーヌが述べたこの悲劇の要件は、世俗悲劇のすべてにおいて、幸福な結末に達する人物といえどもこれを備えている。ただ一つ、1676年に手直しされた《アンドロマク》においてのみ、これを欠いていると言えよう。この点において、後年の宗教劇の性格、即ち破滅する人々に対して、幸福に達する人々の側には同情はなく、むしろ復讐の喜びをもってこれに対する劇の性格に近い。

宗教劇においては、ユダヤの民、ユダヤ教を奉ずる王が結末において救済されるが、そこではこの小論で問題としている、結末における二分の相は必然的にもたらされる。宗教劇では善なる人々と悪なる人々が明確に指定されているからである。然るに世俗悲劇ではアリストテレスの教訓に従って、完全なる悪人も完全なる善人もいない。《アンドロマク》においても然りである。アンドロマクも、ユリスの手からアスチャナクスをかばい、他の子供を身代わりに殺させたり、婚礼を策略に用いようとするのである。

ところで、《アンドロマク》の結末の一方、アンドロマク母子の王位到達に視点をおいて全体を眺めるなら、アンドロマク母子の王位到達をもたらすために、他の三人が手段、あるいは犠牲になったと言えよう。王位到達は偶然的に達成されたが、すべての登場人物がそのために協力したことになる。

ここで登場人物達が願い求めたものについて考えてみよう。オレスト、エルミオヌ、ピリュスの三人は片思いの強い情念から、その恋愛成就そして結婚を求めている。《アンドロマク》において、そしてラシーヌの世俗悲劇のすべてにおいて、恋愛は純然たる恋愛に止まるものでなく、すぐその向こうに結婚を控えた恋愛である。したがって、登場人物が恋愛を口にしたり、心に浮かべる時、それは結婚と切り離せない。

一方、アンドロマクはピリュスに、彼の願いを退けて、海中の小島でひっそりと暮すことを求める。さもなければエクトルの墓で親子三人永眠したい、と語る。彼女の真の願いは、アスチャナクスの安全である。ところでそれは、アンドロマクの心を求め、結婚をせまるピリュスの願うところとなる。ピリュスはアンドロマク母子の、より厳密にはアスチャナクスの利害を共にし、一体化する傾向を強くもつ。そうして彼は、アスチャナクスのためにトロイアの王位を与えようと言う。ピリュスがアンドロマクに語るこの台詞は、アンドロマク母子の心の底にある願いを代弁したものに他ならない。アスチャナクスの安全は、王位到達によって最終的に保証されるからである。

このように見てくると、《アンドロマク》は二つの目標、恋愛・結婚と王位をめぐる悲劇ということが出来る。ところがラシーヌ悲劇は宗教劇を別にして、すべてこの二つのテーマを問題としているのである。これは最初の悲劇《ラ・テバード》で既に、しかもクレオンの口から直接表明されていたのである。

そしてこの幸いなる日、お前は目にするだろう、わたしの中に

王位についての野心家と、王冠を戴いた恋人を。

わたしは天に、姫と王位を求めたのだ。

天はわたしに王笏を与え、アンチゴーヌを下さるのだ。

……

そして天は同時に、彼らの王位と彼女の心をあげわたしてくれるのだ。

(第五幕第4場)
₍₁₆₎

ラシーヌの世俗悲劇で常に問題とされた、この恋愛・結婚そして王位のテーマは何を意味しているのだろうか。これら二つのテーマは古来、一般に神話、物語などでしばしば取り上げられたテーマでもある。最も素朴な形では、貧しい若者が苦難、試練を経て、王女と結婚し王位に上るというものである。それは人が成長して一人の人間として固有の社会的存在権を獲得することの、象徴的表現ということができよう。結婚と王位は、その象

徴とみることができる。ラシーヌが悲劇で問題としたのも、本質においてこれと同じである。

《ラ・テバイード》では、劇の主要部分⁽¹⁷⁾は兄弟の王位争いで、恋愛・結婚の追求は僅かに、それぞれ短い第五幕第4、5、6場によって明示されるのみであった。ここでは王位も結婚も誰一人獲得することはできない。これに続く《アレクサンドル》では、アキシアヌに対する恋愛の成就を願ったタクシルは破滅し、この点でラシーヌ劇の性格をもっているが、ラシーヌが他の一連の世俗悲劇で追求した王位獲得のテーマはみられない。ポリュス、アキシアヌの間には相愛の恋があり、二人共王位を守る戦いはしても獲得を問題としているのではない。アレクサンドルとクレオフィルの場合も、既に恋愛は成立しており、また王位獲得は問題とならない。この悲劇では、R.ピカールが述べるように、読者はラシーヌとコルネイユの双方を経験する。結末においてアレクサンドルとポリュス、アキシアヌの間には、封建的主従関係⁽¹⁸⁾が成立する。

しかしながら、既にこの悲劇でも、二種類の運命の結末、即ち、恋愛を追求して破滅するタクシルのそれと、他の四人の安泰なそれとの対比がある。ただし、“この場合も《アンドロマク》の1676年以後の版にみられる明確な対比は示さない。アレクサンドルとクレオフィルの結末には、タクシルの不幸な最後が影を落とし、ポリュス、アレキシアヌは一旦アレクサンドルの軍に敗北し、然る後に再び王位を保証されるからである。

ここで《アンドロマク》以後の世俗悲劇を、恋愛・結婚と王位のテーマについて概観してみよう。そこには世俗悲劇の総決算である《フェードル》の結論、恋愛の否定、恋愛を追求する者の破滅の図式が明瞭にみてとれる。そして苦境を救済される人々は、自ら恋愛を否定していくのである。この図式は更に、宗教劇においても成立すると言えよう。恋愛感情が排除された宗教劇においては、初めから恋愛は否定されていて、ユダヤの民、ユダヤ教を奉じる王が救済される。

したがって、初演の時の《アンドロマク》は、1676年以後に見せる際立った対比は見せないものの、そこで初めて恋愛を追求する登場人物の破滅、それを否定する登場人物の救済の、ラシーヌ悲劇の傑作群の図式が提出されたと言することができる。

《アンドロマク》においては、恋愛・結婚という形であれ、隷属の境遇から真に身の安全を保証する王位の形であれ、その追求によってすべての登場人物が、固有の社会的存在権を心から望んだ。したがって、アンドロマク母子の王位到達の成果は、言わば共有さるべきものである。根底において共通の願いを、アンドロマク母子が代表して実現したのである。

Iで提起された、結末の二分の問題は次のように答えられるであろう。《アンドロマク》における根底の問題は、各人物共通の、固有の社会的存在権獲得の願いであって、恋愛を

追求する形でなく、否定する形で達成されるという図式がここに提出されたのであり、そして、結末のみに着目すれば二分する印象は不可避であるが、これがラシーヌ悲劇の性格というべきである。ラシーヌの悲劇の結末は、《アンドロマク》の他にも、また宗教劇を除いても、このような性格から、幸福に至るものもできてくる。

以上の考察から、初めに提出された問題、《アンドロマク》がラシーヌ悲劇を革新したとされる理由の一端も自ずと示されるであろう。即ち、《ラ・テバード》で提出された恋愛・結婚そして王位のテーマは、そこでは後年の傑作で定着するラシーヌ悲劇の解決の図式が明瞭でなく、《アレクサンドル》では、異質の問題が大きな部分を占め、《アンドロマク》で初めて、この図式が明確に打ち出されたからであると。

《アンドロマク》の書かれた1667年は、ポール・ロワイヤルから厳しい叱責を受け、一方、テレーズ・デュ・パルクとの恋愛を得た、ラシーヌの人生において最も重大な、危機と飛躍の時期であった。そのような人生の深い経験から、ラシーヌは自己の内にある問題を見極める感覚を養い得たのであろう。それが、《アンドロマク》を先立つ二作品から隔てるもの、ラシーヌ的テーマの深まり、進展を促したと考えられる。

註

- (1) Subligny; Andromaque ou la Folle Querelle . 1668.
- (2) アリストテレス; 詩学, 邦訳 松浦嘉一訳, 岩波文庫, 第13章.
- (3) Ch. Mauron ; L'inconscient dans l'oeuvre et la vie de Racine, José Corti, 1969.
- (4) ibid. ; P.139. P.177.
- (5) 父 père は Freud の言う, エディプス関係における父で, ドウブルdouble は, 主人役の相棒にくっついて, 主人役と同じ望みをもつが, 実行, 実現能力はなく, 常に主人役の道具として仕える.
- (6) S. Freud ; Einige Charaktertypen aus der Psychoanalytischen Arbeit , 1916. 邦訳『フロイト著作集』第6巻人文書院 1978. P 134.
- (7) 太母mère archaïque は母親の中にひそむ子殺しの存在.
- (8) J. Racine ; Oeuvres complètes tome 1, Bibliothèque de la Pléiade, 1969, p. 281.
- (9) ibid. ; p . 283.
- (10) M. Delcroix ; Le sacré dans les tragédies profanes de Racine , Nizet , 1970. p . 285 à p . 314
- (11) C.f. L. Goldmann , Le Dieu caché . Gallimard . 1956, p . 358.

- (12) J. Racine ; op. cit., Préface de 《 Bérénice 》 P. 465.
- (13) ibid. ; P. 256.
- (14) ibid. ; P. 278.
- (15) ibid. ; P. 256. P. 296.
- (16) ibid. ; P. 166.
- (17) 結末でのアンドロマク母子の王位到達は, vraisemblance の観点からすると, 問題がある. なぜなら, アンドロマク母子はかつての敵国の将の妻子であり, .ピリュスとの婚礼の直前まで奴隷であって, エーペイロスはこのような二人を王位に戴いてギリシャに対抗し得るとは考えられないからである. したがって, 二人の王位到達は, 象徴的に解すべきである.
- (18) J. Racine ; O. P. cit., 'Notes' 《 Alexandre 》 P. 174.

(岡山大学教養部非常勤講師)